

独身者のパートナーシップと家族実践
——中年期の LAT (Living Apart Together) に着目して——

栗村亜寿香 (関西大学・日本学術振興会)

1. 背景

日本では 1990 年頃から 50 歳時点の非婚率が上昇している。近年では中年期独身者の生活状況に関する研究も増えており、中年期に交際相手が果たすサポートやケアの役割にも関心が向けられつつある (山田 2021)。しかしながら、日本ではまだ中年期独身者の交際に焦点をあてた研究が行われていない。対して、欧米では中年期の交際研究が蓄積され、同棲だけでなく、別々に暮らす親密な関係 (LAT : Living Apart Together) についても調査研究が進んでいる。こうしたことから、本報告では日本における中年期独身者のパートナーシップを検討するうえで、欧米の LAT に関する研究の知見を参照する。そのうえで、D.モーガンの「家族実践」および J.フィンチの「家族ディスプレイ」の観点から、中年期独身者のパートナーシップのありかたについて検討する。

2. データと方法

使用するデータは、2025 年に全国の 35～59 歳の非婚男女 30 名に対して行った調査から得たものである。対象者は調査会社のモニターに登録しており、事前のアンケート調査に回答しインタビューに応諾した人のなかから、結婚経験がなく、別々に暮らす交際相手がいる人を選定した。インタビューは半構造化されており、対面またはオンラインで、1 名につき 1 回、70 分から 120 分かけて行った。

本報告では、このうち長期的なパートナーシップを形成してきた人 (おおそ交際期間が 10 年以上) に焦点をあて、「家族実践」および「家族ディスプレイ」の概念を用いて分析を行う。

3. 結果

まず、対象者が交際相手をどのような存在とみなしているのかに関して、交際期間が 20 年を超える複数のケースで、交際相手は「家族」とみなされていた。次に、家族ディスプレイの観点から、互いの家族への紹介や交際相手の呼び方を検討したところ、中年期独身者に特有と思われる「ディスプレイしがたさ」がみられた。さらに、カップルや家族に関わる実践として、日常的な実践 (連絡・会うこと) やイベント、サポートやケアの実践に着目し、性別役割分業や家族的機能の点から検討を行った。

以上の結果をふまえ、今後は中年期独身者のパートナーシップを家族実践・家族ディスプレイの観点から分析する意義について考察を進めていきたい。

4. 文献

Finch, J., 2007, Displaying Families, *Sociology*, 41(1): 65-81.

Morgan, D., 2011, *Rethinking Family Practices*, Palgrave Macmillan.

栗村亜寿香、2025、「中年期独身者の交際 (LAT) に関する欧米の研究動向——日本での調査研究に向けて」『ソシオロジ』69(3): 61-77.

山田昌弘、2021、「中年独身者の生活実態と将来不安——50 代独身者への質問紙調査から」『中央大学社会科学研究所年報』26: 15-30.

(キーワード : 家族実践、独身者、パートナーシップ、LAT)